



京都大学優秀女性研究者賞（たちばな賞） 応募者募集

この京都大学優秀女性研究者賞（たちばな賞）は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって、研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成を目的として、創設されました。

1. 授賞対象および分野

人文・社会科学又は自然科学の分野において優れた研究成果を挙げた本学に所属する40歳未満（平成20年4月1日現在）の若手の女性研究者（大学院博士後期課程在学者を含む）

2. 募集期間

平成20年9月22日（月）～11月28日（金）

3. 結果通知

平成21年1月末通知予定

4. 選考

本学に所属する教職員からの推薦に基づき、優秀女性研究者賞選考委員会が審査選考して受賞者を決定する

5. 顕彰

受賞者は、研究者部門・学生部門各1名ずつとする

6. 表彰

表彰は、総長が表彰状を授与する



詳細は、女性研究者支援センターのホームページを参照してください。

京都大学における男女共同参画に資する調査研究「WG公募委員」および「調査研究企画」募集

京都大学女性研究者支援センターおよびグローバルCOE拠点「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」は、共同して、「京都大学における男女共同参画に資する調査研究」を実施します。この共同研究の実施にあたるWGの公募委員と調査研究企画を募集します。

WG公募委員には、応募に際して本年度に実施したい調査研究企画を提案し、採用された場合は、「調査研究企画実施グループ」とともに、その実施にあたっていただきます。

WG公募委員の応募資格は、京都大学に在籍する研究者、職員、および学生の皆さんです。男女共同参画という観点から見た京都大学の実情を解明し、効果的な施策の提言につながる企画をもつ応募をお待ちしています。

公募期間 2008年9月8日～9月30日（必着）

詳細は、京都大学GCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」のサイトを参照してください。（<http://www.socio.kyoto-u.ac.jp/intimacy/>）

おむかえ保育（10月1日より）



保育園と学童保育のお迎えの時間差に困っていませんか？

センターでは、子どもを保育機関に迎えに行くことのできない研究者に代わって、シッターが子どもを迎えに行き、センターの保育室にて保育を行う「おむかえ保育」を開始します。

利用日時：月曜日から金曜日 午後5時から10時

利用資格：原則として本学に所属する女子学生、女性研究者（男性も利用できます）

利用定員：生後2ヶ月目～小学3年生までの子ども5名。

登録と申込が必要です。有料です。（学部学生・院生は半額補助があります。）

詳細は、女性研究者支援センターのホームページを参照してください。

【女性のための相談室 開室日】 利用には予約が必要です。

10月3日、10日、17日、24日、31日 11月7日、14日、21日、28日 12月5日、12日、19日、26日

夏休み キッズ サイエンス スクール

昨年に続き、小学校の夏休み期間を利用し、8月18日（月）から22日（金）の5日間「夏休みキッズサイエンススクール」を開催しました。女性研究者が研究・教育に十分な時間をとることができるように、また、子どもたちが科学に興味を持ってくれるようにとの企画です。参加者は小学校1年生から3年生の12名です。

スクールの午前中は、保育士の指導で、工作や絵画制作を行い、午後は、科学教室を開催しました。毎日、異なった取組があり、充実した5日間でした。

<1日目>

稲葉センター長による「開校の挨拶」で、キッズサイエンススクールを開始しました。まず、自己紹介からです。すぐに名前も覚え、ワイワイと遊び始めました。



午前の活動は、「紙粘土と磁石を使ってのお魚作り」です。工作よりもお弁当が気になる子どもたちでした。午後は、情報科学研究科の塩瀬先生による「おとにさわる ほしにさわる」というタイトルの科学教室です。

音のふるえを体感し、音を耳と目で聞き、さわってみました。

<2日目>

午前中は、隣の友だちと相談しながら、工夫をこらした自分だけの素敵なスクラップブックを作りました。みんな、すっかり仲良し



<夏休みキッズサイエンススクールアンケート結果>

応募者に協力いただいたアンケート回答の概要を報告します。参加児童保護者からは、概ね好評を得ることができましたが、「参加者枠が少ない」「参加機会を増やしてほしい」というご意見が多く寄せられ、このスクールへの期待の大きさを感じました。

<依頼者数 48名 回答者数 25名>

①参加の動機は？

- ・子どもにサイエンスに関する興味を持たせたい
- ・学童とは違う時間をもてると思ったから
- ・子供自身が内容に興味をもった
- ・大学の教育の現場を子どもに感じさせる絶好の機会だと思ったから
- ・昨年参加しとても楽しかったから

②開催時期

ちょうどよい (72%)

もっと早いほうがよい (20%)

③開催期間

ちょうどよい (76%)



です。お弁当を食べた後、桂キャンパスにある工学研究科の伊勢先生の研究室に行きました。「おとのつたわりかた」の科学教室です。音の響きを体験する不思議な部屋に入りました。出てくる時の表情はとても豊かでした。

<3日目>

午前は「お金が消える貯金箱」作りです。真剣な顔で紙を切り、糊づけをする子どもたちです。午後は、関西電力株式会社提供の科学教室「でんきってどうやってつくるんだろう」です。ペットボトルで風力発電機を作り、LEDを点灯させました。



<4日目>

午前中は、はじき絵制作です。何の絵なのか、口ぐちに説明してくれます。手も口もよく動きました。午後は、センターの建物改修を指導された、工学研究科の安枝先生による「もけいをつくろう」の科学教室です。部屋の変形が自由な建物の模型を作りました。



<5日目>

スクール最終日なので、午前中は、ちょっと難しい「モビール作り」に取り組みました。曲りくねった枝で、遊んでしまいましたが、最後は集中して取り組み、素敵な作品ができました。午後の科学教室は、総合博物館での「子ども博物館」です。岩崎先生に案内していただき、3Dシアターを見たり、骨・化石の標本をさわらせてもらいました。



もっと長いほうがよい (20%)

- ・2週間程度
- ・2、3日間を3回くらい
- ・夏休みに広くわたって開催
- ・1か月程度

④その他、ご意見・感想など

- ・受け入れ人数をふやしてほしい
- ・実費の一部を保護者が負担するかたちにしてでも、もっと大勢参加できるようにしたほうがよい
- ・夏休みだけでなく冬休みや春休みに短期でもいいので開催してほしい
- ・屋内だけでなく、屋外で体を使ったプログラムがあればよい
- ・低学年だけでなく高学年まで対象を広げてほしい
- ・小学生を対象とした「ジュニアキャンパス」のようなものがあればより多くの人々が利用しやすいのでは
- ・研究室の個性ある研究テーマ、あるいは最先端の現場に子どもがふれる企画をしてほしい



<スクール担当 育児・介護支援事業 WG>

私の研究

「少年」「少女」とは何か

女性研究者支援センター

今田絵里香

わたしが取り組んでいるのは「少年」「少女」とは何か、とりわけ「少女」とは何か」という問いである。

わたしたちが「当たり前」とみなしている家族の在り方は日本においては 1910 年代～20 年代によく生まれたとされている。夫が会社で仕事をおこない、妻は家事・育児をするという働き方。子どもを愛護し、学歴を獲得させるために教育すること。こういったことは、都市を中心に俸給生活を送る人々（教員・会社員など）が誕生し、その人々が実践していったことで、広まっていったといわれている。この人々が作り出した家族を近代家族という。

近代家族のなかで子どもは非常に強い関心を寄せられることになった。子どもは大人と異なって純真無垢であるとされ、純真無垢の白紙のような存在であるからこそ、教育を与えるべきだとされたのである。しかし、これまでの研究では、その子どもが男の子であるか女の子であるか、ということにほとんど注意が払われてこなかった。わたしはそれがずっと不満だった。

わたしは典型的な近代家族のなかで育った。父は会社員、母は専業主婦。父と母は団塊の世代である。この世代は近代家族を日本社会において「当たり前」のものとして広め、画一化させた世代として知られる。子どもには非常に教育熱心である。しかし、わたしはこのような近代家族のなかで、あるいは近代家族と手を結ぶ近代学校教育のなかで、「男の子と女の子の教育は違っている」と、いやというほど思われてきた。それは「男の子は公人・職業人になるための教育」「女の子は良妻賢母教育」が与えられてきたという単純なものではなく、もうちょっと複雑なものであった。それはなんといったらいいのだろうか。父母と教員によって、男の子と同じように学歴獲得に追い立てられつつ、母や身近な女の人が、父や身近な男の人とはまったく異なる生き方をしているのを目の前にして、「学歴を獲得しても男の人のようにはなれないんだ」と知らされつづけるというような、そういう複雑な形である。そのたびに「近代家族にとって、あるいは近代社会にとって、女の子っていったい何なん



だろう」と、考えつづけてきた。したがって、これまでの研究には満足できなかった。近代において生み出された「近代家族における女の子」の正体を知りたい。そんなふうになるようになったのである。

ところで、都市居住の俸給生活を送る人々の子どもをターゲットにして、たくさんの児童雑誌・児童書を出版した会社がある。それが実業之日本社という出版社である。実業之日本社は『日本少年』『少女の友』という少年雑誌・少女雑誌を刊行した。『日本少年』『少女の友』は、俸給生活を送る人々の子どもに、「少年」「少女」というカテゴリーを教えた。それまで「少年」は年少者男女を示すカテゴリーとして使用されており、とくに男子だけを示すものではなかったのである。ところが、『日本少年』『少女の友』など、「少年」「少女」をタイトルに含んだ雑誌が刊行されたことによって、「少年」は男子を示すもの、「少女」は女子を示すものとして、人々の間に広まっていった。なかでも『日本少年』『少女の友』は、都市居住の俸給生活を送る人々の子どもに狙いを定め、その子どもたちにふさわしい「少年らしさ」「少女らしさ」を創出し、子どもたちをひきつけていったのである。子どもたちに「こんなふうになりたい」と思わせるために、それはもうステキな「少年」「少女」というヴィジュアル・イメージ、ライフスタイル、ファッションを描き出していった。中原淳一・高島華宵・露谷虹児の描き出す抒情画のなかの少女たち。吉屋信子・川端康成・林芙美子の描き出す少女小説のなかの少女たち。このような少女像は今でもファンが存在するほど魅力的である。つまり、『日本少年』『少女の友』は、都市居住の俸給生活を送る人々、そしてその子どもに、「近代家族の在り方」「近代家族における男の子の在り方」「近代家族における女の子の在り方」を描き出し、与えていったのである。

そこで、わたしは『日本少年』『少女の友』の創出し、広めた「少年」「少女」というイメージがどんなものだったのか、調査することにした。そうすることで、近代家族における男の子・女の子の理想像について、捉えることができると思ったからである。「少女」についてはすでに『「少女」の社会史』（勁草書房、2007 年）に調査結果をまとめた。今は「少年」について調査している。また、戦後の「少女」についても調査を着手したところである。

<夏休みキッズサイエンススクールの様子>



連載：研究者になる！－第13回－



医学研究科
近藤科江特定教授（科学技術振興）

私が研究者になりたいと思ったのは、大学3年の時、薬理学の授業を受けていた時だった。授業をしていた助教授が薬理の基本を教えようとして、自分の研究から得られた結果を熱く語る姿をみて、「自分もやってみたい」と単純に思った。その足で助教授の所に行き研究をさせてくれるように頼んだ。助教授にしてみれば、実験の「じ」も知らない学生が何の知識も無く「研究をしたい」と来たわけだから迷惑な話だ。その時は断られたが、4年生の配属の時に、あきらめずに再度願い出た私を受け入れてくれて、とにかく無我夢中で研究に明け暮れる日々が続いた。

子供のころ体の弱かった私は、薬の世話になる事が多かった。「薬は凄い。多くの人の役に立つ。」と子供ながらに薬に憧れと尊敬の念を持っており、薬学に進んだ。しかし、大学で学んだ事は、自分の思っていたものとは何か違っていた。自分の進路も考え始めていた時にめぐりあった「研究」。やっと探していたものと巡り合えた気がして、それこそ寝食も忘れるほどその魅力に取りつかれた。4年生では必須科目以外は全くとらず、国家試験の準備講座も一回も出席せず、国家試験の2週間前まで実験をしていた私は、その学年で不合格になった二人のうちの一人であると誰もが疑わなかった。それほど実験三昧の日々を過ごした。

しかし、時代は今から四半世紀以上も前のこと、社員募集要項に「男子のみ」と明示される時代だ。大学院も「女性は不可」と受験すら許されず、研究者への道は断たれたと諦めても良い状況だった。同級生のほとんどが薬剤師になっていく中で、留学を決心した。今ならば、出身校の大学院に進学できなければ、他大学を受験することを思いつくのが普通なのだが、当時は出身校以外への大学院進学は極めて難しかった。たまたま米国の「免疫療法」の最先端の研究を紹介する番組を見て、ぜひ「免疫」を研究しに米国に行きたいと思った。しかし、大学の学費も生活費も自分で賄っていた苦学生的身で、留学は無謀な計画だった。思いついた日から、奨学金を取るための活動を開始し、東京にも出かけて行った。たまたまサークルの顧問をしていた先生のご厚意でロータリー財団の奨学金を頂ける事になり、留学が実現した。今でも感謝の気持ちで一杯だ。ただ、留学先は自由に選ぶことができず、結局「免疫療法」に関する研究に携わる事はできなかった。目の前にある課題を克服して、多くを学ぶこ

とに専念する留学生活が続き、目的を達すること無く、修士を修得して帰国した。

帰国後も「免疫」に関する研究に携わる機会を得ることは無く、がんの研究に携わり現在まで続けている。医学研究科で博士を修得したが、博士号をもった女性に研究職は皆無の時代だった。教授が斡旋してくれた企業の研究職は「短大出も医学博士も扱いは同じだ」と言われ、就職を断った。その後は、研究生、日本学術振興会研究員、新技術事業団研究員、京都大学医学研究科研修生と11年余ポストク生活を送り、その間結婚と出産も経験した。何の制度にも守られない出産と子育ての中で、多くの物を犠牲にせざる得ない研究生活であった。

何度も「研究者」を続けることを断念せざる得ない状況に直面し、その度に「何故研究を続けたいのか」と自問自答した。「研究が好きである」ということを確認すると同時に、「まだ何も世の中の役に立つものを創出していない」という反省があった。「研究者になってよかったのか？」という問いは今もあり、その答えはまだ出ていない。ただ、今年特定とはいえ教授に就く事ができ、6月には第13回日本女性科学者の会・奨励賞を頂き、少なくとも「研究者を途中で投げ出さなくてよかった。」と心から思う事ができ、自分なりに一区切りつける事ができた。同時に、ここまでの道のりは決して平たんではなかったし、自分でも最大限の努力をしてきたけれども、なにより、それを支えてくれた多くの人々の援助があってこそ今があると、「感謝」の一語に尽きる。

つい最近、学会でお会いした若い女性研究者が、自分の恵まれない研究環境を愚痴っているのを聞いて、老婆心ながらこう言った。「たとえ教授になっても、自分のしたい研究が自由にできる環境になるということは、まずないでしょう。今与えられている環境がベストの環境だと思って、自分の持っている能力や力量を最大限に発揮できてこそ、次の道が開けてくるものではないでしょうか？」これは、いつも自分に言っている言葉である。

最近では、男女共同参画のための様々な活動にも公的な資金が投入されるようになり、堂々と議論もできるような環境もできつつある。私が体験してきた多くの困難も「しなくても良い苦労」として昔話になりつつあり、本当に喜ばしいことだと思う。同時に「研究者」を続けることを断念せざる得ない状況に直面する機会を失う事で、「何故研究を続けたいのか」と自問自答する機会を失うことになるのではないかと杞憂する。男女を問わず、「研究者」は目的をもった研究者であり続けてほしいと願っている。

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>